山梨県コンクール　三部　佳作賞

　私の地域の水田

北杜市立甲陵中学校一年

　　　　　　　　　　　　　　　　　中村　彩音

　私の家の周りは田んぼだらけだ。祖父も稲作をしている。田舎だなと思う。私は田んぼをみて四季の変化を感じている。通学路は田んぼが永久に続くように並んでいるので景色の良さに魅了される。田んぼでは季節の中でも夏が特に好きだ。稲が育って生き生きしているように見えるからだ。太陽の光が水面に当たり、田んぼが輝いていて自分も元気をもらっている。しかし、自然が豊かなため虫がたくさんいることだけは好きになれない。虫を見るだけでぞっとしてしまう。私はお米が好きなので共存共栄しなくてはいけないなと考えている。

　小学生のころ、お米の育ち方について学習した。祖父が作っているので、田植えや稲刈りは手伝ったことがあった。稲刈りはずっと腰をかがめているので本当に大変だった。しかし、私の知らないことがたくさんあった。実際には田植えをするまでの種まき、田おこし、代かきと様々な作業がある。田植えをしたらただ待っているのではなく様子をみながら肥料をまくことや田んぼをみて水の管理の判断をする。除草などもしなければならない。難しそうだ。おいしいお米を作る祖父には見る目があり、それは長年の経験が積み重なった証だと感じた。また、稲刈りを行った後も、乾燥、もみすり、機械の片付けと約八ヶ月に渡って米作りをするのに驚いた。

　さて、お米には古くからの歴史がある。日本に稲作が伝わり広まったのは弥生時代だ。当時は太下駄や石包丁を使い稲作をすべて手作業で行っていた。鎌倉時代になると牛や馬の力を利用して土地を耕す傾向がみられ、木の道具から鉄の道具へと変わる。現在では技術が向上し、多くの作業をトラクターやコンバインなどの機械で行えるようになった。弥生時代の人がみたらどう感じるだろう。

　私は今年北杜市の三分一湧水に行った。年間の湧水量が三百十万トンで湧水を三方向の村落に平等に行きわたるよう利水したのが名前の由来だ。三分一湧水ができたことで広い地域でお米が育てられ生産量が上がった。構造を考えた昔の人々は知恵がとても優れていると感心し、今でも三つの地域で田んぼが作られていることに驚いた。お米の品種改良もされていて、昔は北海道では作られていなかったが現在では国内生産量が第二位で驚く。

　またお米の炊き方も変化してきた。かまど、鍋、炊飯器と今はボタン一つで炊くことができるのが当たり前になってきている。私はお米を鍋で炊いたことがある。三分など細かい時間で火の調整が必要で時間をずっと気にしていなければいけないことが困難だった。私は上手にできず、下が少し焦げてしまった。ボタン一つでご飯が炊けるのは当たり前のことではなく、昔の人々の苦労があるからだ。昔の人々に感謝してお米を大切にしていきたいと改めて感じた。一方で、昔から現在まで変わらないのが水の管理だ。定期的に水が４田んぼに張っているか確認しなければいけない。もし私が育てるとしたら時間的にも水を確認することはできるけれど調節はできない。仕事をしながらお米作りをしている人は両立させて水の管理をしているので尊敬する。私もいつかは祖父の田んぼで稲作をする時が来るかもしれない。この作文を書くにあたり、将来のことを少し考えるきっかけとなった。

　私はお米が好きだ。毎日食べる。お米には主にエネルギーのもとになる炭水化物が含まれている。でんぷんや食物繊維も多く含んでいるのでとても健康的な食物だ。そんなお米だが生産量はピークに比べ減っている。売り物のお米が余ってしまい販売価格が低下してしまうため、生産を減らしているそうだ。小麦や大豆に転作する農家もいる。私の住んでいる地域は景観を守る地域に指定されている。私はこれから将来のことを考えながらお米と景観の良さについて考えていきたい。